

〈原著論文〉

助産師教育における臨床助産学セミナーの意義

Significance of Clinical Midwifery Seminars on Midwifery Education

市川 きみえ¹, 田中 恵子², 藤野 百合³
生駒 妙香⁴, 石田 美佳子⁵, 寺本 久美子⁶

要旨

本研究は、A大学における学士課程の助産師教育に効果的なカリキュラムを検討するために、開校初年度から継続的に行われてきた臨床助産学セミナーについて、教育上の意義を検討することを目的に行われた。なお、A大学の臨床助産学セミナーは、外部から講師を招き、A大学の助産師学生と臨床助産師と一緒に受講するセミナーである。過去に行われた臨床助産学セミナーについては助産師教育課程卒業生全員を対象に、また、2019年度の臨床助産学セミナー（全3回）についてはセミナーの受講者（助産師学生と臨床助産師）を対象に、アンケート調査を実施した。その結果、継続的に行われてきた助産学セミナーは、卒業生にとっては臨床での自律的な助産実践に役立っており、在校生は助産学実習で助産ケアに直接役立っていた。また、受講者である臨床助産師は学生と学ぶことがモチベーションや学習意欲の向上につながっていた。以上より、これまで行われてきた臨床助産学セミナーの教育上の意義が明らかとなり、今後も継続していく必要性が示された。

Abstract

The purpose of this study was to examine the educational significance of clinical midwifery seminars, conducted continuously from the first year of implementation, in order to develop effective curricula for undergraduate midwifery education at University A. Clinical midwifery seminars at University A invite external lecturers and are attended by both midwifery students at University A and clinical midwives. Questionnaire surveys were administered to all graduates of the midwifery education program concerning past clinical midwifery seminars, and to all seminar participants (midwifery students and clinical midwives) regarding the clinical midwifery seminars (3 total) offered in 2019. It was found that ongoing midwifery seminars aided graduates in their autonomous clinical midwifery practice and current students of midwifery care in their midwifery practice. Moreover, for midwives who participated in the seminars, learning with students enhanced their motivation for learning and practice. These results demonstrate the educational significance of the clinical midwifery seminars offered in the past and the need to continue offering them in the future.

キーワード：助産師教育，助産学セミナー，助産実践
midwifery education, midwifery seminars, midwifery practice

I 緒言

我が国における助産師教育は、様々な教育課程で行われており、2018年度の助産師教育機関数は、大学院39校（18.8%）、大学専攻科・別科39校

（18.8%）、大学83校（39.9%）、短期大学専攻科4校（1.9%）、養成所・専修学校43校（20.2%）の合計208校である（文部科学省、2019）。A大学の助産師教育課程は、学士課程で行われているが、この学士課程による助産師教育は全体の4割と主流を

| | | | | | |
|---|-----------------|--------|------|------|----------------------|
| 1 | Kimie ICHIKAWA | 千里金蘭大学 | 看護学部 | 看護学科 | 受理日：2020年9月4日 査読付 |
| 2 | Keiko TANAKA | 千里金蘭大学 | 看護学部 | 看護学科 | |
| 3 | Yuri FUJINO | 千里金蘭大学 | 看護学部 | 看護学科 | |
| 4 | Taeko IKOMA | 千里金蘭大学 | 看護学部 | 看護学科 | |
| 5 | Mikako ISHIDA | 千里金蘭大学 | 看護学部 | 看護学科 | |
| 6 | Kumiko TERAMOTO | 千里金蘭大学 | 看護学部 | 看護学科 | |

占めている。

このように、多様な教育課程で行われている助産師教育は、質の担保のために、助産師教育の到達度について指標となるものが求められ、全国助産師教育協議会(2012)では、2012年に「助産師教育のコア内容におけるミニマム・リクワイアメント項目と例示」として、助産師教育のコア内容、教育機関や就業年限の違いにかかわらず、助産師の資格を取得するのに最小限の教育内容を示している。そして、教育課程においては大学院への移行を進めるべく、2018年12月に、全国助産師教育協議会(2018)は文部科学省と厚生労働省に「助産師教育の質の保障、助産師養成数の確保に関する要望書」を、2019年5月には、日本看護協会(2019)が文部科学省に「2020年度予算・政策に関する要望書」を提出している。大学院教育への過渡期中で、学士課程における教育は、更なる充実を図っていくことが重要である。

助産師は自律した判断と実践能力が問われる職業であり、自律した実践力を養う教育が求められる(国際助産師連盟、2010)が、学士課程では、看護師資格を持たない学生に、過密なカリキュラムの中で教授するため、教育上の工夫が必要となる。そこで、A大学では、自律した実践力を養うための教育方法の1つの工夫として、初年度(2011年度卒業生が1期生)から、臨床助産学セミナーを開催してきた。これは、A大学独自の取り組みであり、開業助産師を中心に第一線で活躍されている助産師を講師に招き、A大学の学生のみならず、実習施設の助産師など、テーマに関心のある助産師を受講対象としたセミナーである。開催の時期は、4年生の臨地実習開始の1~2か月前であり、これまで学生らは参加者である臨床助産師と学びを共有してきた。

春名(2019)は、助産師基礎教育の課題として、助産師は、法律に基づいて正常な妊娠・分娩・産褥経過であれば助産師の責任において診察やケアを行うことができる。しかし、助産師教育の前段階にある看護師教育では、看護師の業務は医師の診断・指示のもとに行う「診療の補助」と「療養上の世話」を行うことと教えられていることと、実習では少子化のあおりを受けて臨床実践を十分に体験することが難しくなっており、実践能力そのものの習得が十分にされず、卒後臨床実践との間に乖離が生じている現状を指摘している。さらに、医療施設では助産師外来や院内助産を推進し

ていく上で、最初に妨げとなったことの1つが、勤務助産師自身が実践能力に自信を持てずに尻込みしてしまうことであったことから、勤務助産師には助産実践能力の強化の必要性があることを指摘している。

また、「助産分野における就職3年未満の実践力評価 一大学院修士課程と大学課程の比較」報告書(日本助産評価機構、2009)によると、学部卒業生に比べ大学院修了生に特徴的なことには「旺盛な探究心」、「助産という仕事への専心」などがある一方、両者に差がない項目は「個人差の大きい助産技術の修得」であり、「修得した助産技術は変わらず、修得までには時間がかかる」ことが示唆されている。

こういったことから、第一線で活躍する開業助産師の「助産技術」に触れる機会となるA大学の臨床助産学セミナーは、学生にとっては助産師の職域の幅や業務の奥深さを知ることができ、自律した助産師像を構築する機会となりえ、同時に臨床の助産師にとっても実践に役立つ教育効果が期待できる。そして、このような助産師教育の実践により、A大学の助産師教育は、2016年3月、日本助産評価機構にて学士課程における助産師教育において、日本で初めて適格と評価されている。しかし、行われた臨床助産学セミナーが、卒後臨床の場で助産実践にどのように役立っているのか、また在学学生および外部の受講者である臨床助産師にとって、このセミナーが助産学実習や臨床現場でどのように役立っているのかについて、これまで調査はなされてこなかった。


そこで、本研究は、助産師教育課程卒業生全員へのアンケート調査と、2019年度のセミナー受講者(A大学3年生・4年生と外部からの受講者である臨床助産師)を対象とするアンケート調査を行い、A大学の臨床助産学セミナーが臨床実践に有益なものであるか明らかにし、教育上の意義を論議した。

II 研究目的

本研究は、A大学における学士課程の助産師教育に有効なカリキュラム編成を検討するために、開校初年度から継続的に行われてきた臨床助産学セミナーが、卒業生にとって自律的な助産実践に役立っているか、また2019年度のセミナーについては、受講者である在校生にとっては助産学実習

表1 A大学で行われた臨床助産学セミナーの変遷

| テーマ | 2010 | 2011 | 2012 | 2013 | 2014 | 2015 | 2016 | 2017 | 2018 | 2019 |
|----------------------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| ペリネイタル・ロスと助産師のケア | | | | | | | | | | |
| 自立した助産師活動 | | | | | | | | | | |
| 助産実践における感性と科学の融和 | | | | | | | | | | |
| 産褥期の母親の気かがりが必要な支援 | | | | | | | | | | |
| フリースタイル出産の理論と実際 | | | | | | | | | | |
| IBCLCによる母乳育児支援 | | | | | | | | | | |
| ウィメンズヘルスからみた骨盤エクササイズ | | | | | | | | | | |
| セクシュアリティと助産師のケア | | | | | | | | | | |

 実施年度

に、臨床助産師にとっては助産実践に有益な学びとなっているかを明らかにすることで、その教育上の意義を明らかにすることを目的に行われた。

Ⅲ 研究方法

本研究で、A大学で開校初年度から継続的に行われてきた臨床助産学セミナーの意義を明らかにするためには、卒業生にとって在学中に受講した臨床助産学セミナーが、卒後臨床の場で自律的な助産実践に役立っているかという長期的な効果と、セミナー受講者である在校生にとっては助産学実習に、そして臨床助産師にとっては臨床の場での助産実践に有益な学びとなっているかという短期的な効果の両方を明らかにする必要がある。そこで、2019年6月～7月の間に、卒業生を対象とする調査（調査1）と、2019年度のセミナーの受講者を対象とする調査（調査2）の2つの調査を同時に行った。なお、2つの調査はともに無記名自記式質問紙調査であった。

調査内容は、調査1は、卒業生が在学中に実習で役立った内容や就職後の臨床実践に役立った内容と今後希望するセミナーの内容であり、調査2は2019年に行われた臨床助産学セミナー、各セミナーの進め方、受講者の理解度、満足度と学びであった。なお、2019年度に実施した臨床助産学セミナーは、『フリースタイル出産の理論と実際』、『IBCLC：国際認定ラクテーション・コンサルタント（NPO法人日本ラクテーション協会、2016）による母乳育児支援』、『セクシュアリティと助産師のケア』であり、『フリースタイル出産の理論と実際』と『IBCLCによる母乳育児支援』の受講者はA大学4年生と臨床助産師、『セクシュアリティと助産師のケア』の受講者はA大学3年生・4年生

と臨床助産師であった。そして講師は、『フリースタイル出産の理論と実際』と『IBCLCによる母乳育児支援』は開業助産師、『セクシュアリティと助産師のケア』は、他学で助産師教育を担う教員であった（『』はタイトルを示している）。

これまでにA大学で行われた臨床助産学セミナーの変遷は、表1に示すとおりであり、卒業年度によって受講したセミナーに違いがある。タイトルや所要時間には多少の変更があるものの、『フリースタイル出産の理論と実際』は2011年度から、『IBCLCによる母乳育児支援』は2012年度から2019年度まで継続して行われており、その他のセミナーは、単発で行われている。2019年度に、新たに行われたものは『セクシュアリティと助産師のケア』であった。

分析方法は、調査1は単純集計、調査2のセミナーの進め方、各セミナーの理解度、満足度は単純集計である。調査2の受講者の学びは在校生、臨床助産師それぞれの自由記述を類似する内容ごとにまとめ、カテゴリーを抽出した。そして、調査1、調査2の結果をふまえ、臨床助産学セミナーは、助産師教育上、自律した実践力を養うための教育方法として意義があるか論議した。

研究倫理は、個人情報保護に留意し、千里金蘭大学疫学研究倫理審査委員の承認を経た（承認番号K19-008）上で、調査を実施した。

Ⅳ 結果

1. 助産師教育課程卒業生が臨床実践で役立った内容（調査1）

1) 有効回答

A大学の助産師教育課程卒業生48名の内、所在不明の6名以外の42名にアンケートを送付し、14名

表2 調査1における対象者(A大学卒業生)の属性

| 対象者 | 卒業年度 | 所属 | 助産師経験年数 | おおよその 分娩介助件数 | 自律的な助産師業務の実施状況 |
|-----|------|-------|-------------|-----------------|-------------------------------|
| A | 2011 | 産科 | 8年 | 250件 | フリースタイル出産、助産師外来、 母乳外来 |
| B | | 産科 | 7年 | 160件 | フリースタイル出産、助産師外来、 母乳外来 |
| C | | 産科 | 7年 | 55件 | 母乳外来 |
| D | 2012 | 産科 | 5年 | 150件 | フリースタイル出産、院内助産、 助産師外来、母乳外来 |
| E | 2013 | 産科 | 5年 | 100件 | 助産師外来 |
| F | | 産科 | 6年 | 95件 | 助産師外来、母乳外来 |
| G | 2014 | 外来 | 5年 | 80件 | フリースタイル出産 |
| H | 2015 | 産科 | 4年 | 50件 | フリースタイル出産 |
| I | | 混合 | 3年 | 60件 | 母乳外来 |
| J | 2017 | 産科 | 2年 | 16件 | |
| K | | 産科 | 2年 | 22件 | |
| L | 2018 | 消化器外科 | 0年(看護師経験1年) | 0件 | |
| M | | 混合 | 0年(看護師経験1年) | 0件 | |
| N | 不明 | 産婦人科 | 無(看護師経験3年) | 0件 | |

から回答を得た。有効回答率33.3%であった。

2) 対象者の属性

(1) 卒業年度別の回答数

卒業年度別の回答数は、2011年度3名、2012年度1名、2013年度2名、2014年度1名、2015年度2名、2016年度0名、2017年度2名、2018年度2名、不明1名であり、2011年度のセミナーを受講した者の回答が最も多かった(表2)。なお、回答者は卒業年度のセミナーを受講しており、『フリースタイル出産の理論と実際』は、回答者全員の14名が、『IBCLCによる母乳育児支援』は11人が受講していた。

(2) 助産師経験年数と現在の所属

回答のあった14名の助産師経験年数は、0年～8年。現在の勤務先の所属は、産科病棟(産婦人科含む)10名(71.4%)、混合病棟2名(14.3%)、外来1名(7.1%)、その他1名(7.1%)であった(表2)。

(3) 分娩介助件数と自律的な助産師業務の経験

対象者の分娩介助件数は0件～250件であった。自律的な助産師業務の経験がある者は、母乳外来6名(42.9%)、フリースタイル出産の介助5名(35.7%)、助産師外来5名(35.7%)、院内助産1名(7.1%)であった(表2)。なお、それらの経験者はいずれも卒後4年目以上の者である。そして、フリースタイル出産の介助経験者5名の分娩介助件数は、皆50件以上であった。

3) 卒業生に役立っていた内容

(1) 在学中、実習に役立った内容

在学中に実習で役立った内容(表3)は、『フリースタイル出産の理論と実際』では、「分娩介助技術の理論」(3名)と「フリースタイル出産介助の演習」(1名)であり、『IBCLCによる母乳育児支援』では、「母乳育児支援の知識」(3名)であった。

(2) 就職後、臨床実践に役立った内容

就職後、助産師業務としての臨床実践に役立った内容(表3)は、『フリースタイル出産の理論と実際』では「分娩介助技術の理論」(4名)と「産婦の分娩法へのニーズ」(1名)であり、『IBCLCによる母乳育児支援』では「母乳育児支援の知識」(3名)であった。

4) 今後希望する臨床助産学セミナー

卒業生が今後希望する臨床助産学セミナーの内容は、「マタニティケア能力」が12名(85.7%)と最も多く、次いで「ウィメンズヘルスケア能力」7名(50%)、「専門的自立能力」5名(35.7%)、「倫理的感応力」2名(14.2%)であった(図1)。

2. 2019年度に行われた臨床助産学セミナーでの学び(調査2)

1) 対象者数

『フリースタイル出産の理論と実際』の受講者は、在校生(4年生)6名、臨床助産師8名(助産師経験年数1年～30年)、『IBCLCによる母乳育児支

表3 卒業生に役立っていた内容

| テーマ | 在学中 | 就職後 |
|-----------------|---------------------------------------|------------------------------------|
| | 実習に役立った内容 | 臨床実践に役立った内容 |
| フリースタイル出産の理論と実際 | ・分娩介助技術の理論（3名） ・フリースタイル出産介助の演習（1名） | ・分娩介助技術の理論（4名） ・産婦の分娩法へのニーズ（1名） |
| IBCLCによる母乳育児支援 | ・母乳育児支援の知識（3名） | ・母乳育児支援の知識（3名） |

() 回答人数

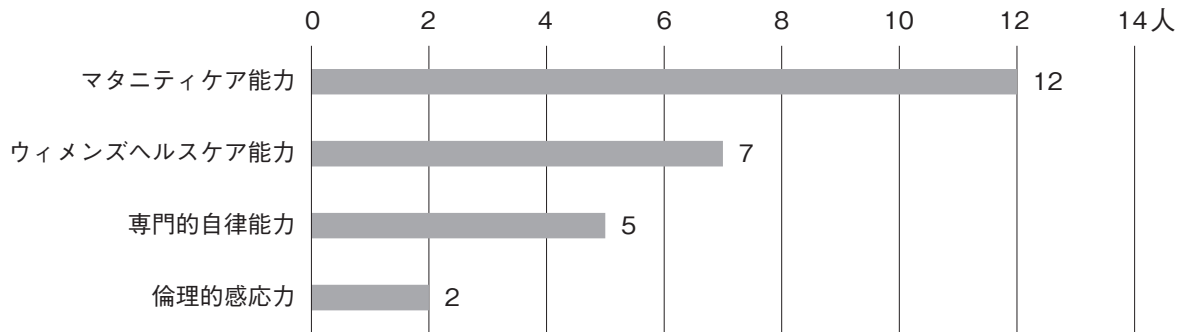


図1 卒業生が今後希望する臨床助産学セミナーの内容

援』は、在校生（4年生）6名、臨床助産師7名（助産師経験年数4年～37年）、『セクシュアリティと助産師のケア』は、在校生13名（4年生6名、3年生7名）、臨床助産師1名（助産師経験年数6年）であり、全員から回答を得た。

2) セミナーの進め方

セミナーの進め方について（表4）尋ねたところ、各セミナーともに「講義と演習のバランスが良かった」と答えた者が多かった。「講義と演習のバランスが良かった」と答えた者は、『フリースタイル出産の理論と実際』では在校生5名（83.3%）、臨床助産師5名（62.5%）、『IBCLCによる母乳育児支援』では在校生3名（50%）、臨床助産師4名（57.1%）、

『セクシュアリティと助産師のケア』は、在校生9名（69.2%）であった。

その他、『フリースタイル出産の理論と実際』では、在校生の1名（16.7%）が、「演習をもう少ししたかった」と答えていた。『IBCLCによる母乳育児支援』は、在校生の2名（33.3%）が「正常・異常を理解した後に演習ができたのが良かった」と、演習の効果につながる授業の構成を評価していた。また、在校生の1名（16.7%）は「映像がわかりやすかった」と、動画を使った授業の効果についても述べており、『セクシュアリティと助産師のケア』で、在校生の3名（23.1%）が「パワーポイントや資料がわかりやすかった」と、資料の効果について述べていた。

表4 2019年度臨床助産学セミナーの進め方

| テーマ | 回答内容 | 在校生 | 臨床助産師 |
|-------------------------------------|-------------------------|---------|----------|
| フリースタイル出産の理論と実際 (在校生6名、臨床助産師8名) | 講義と演習のバランスが良かった | 5(83.3) | 5(62.5) |
| | 演習をもう少ししたかった | 1(16.7) | 0 |
| | NA | 0 | 3(37.5) |
| IBCLCによる母乳育児支援 (在校生6名、臨床助産師7名) | 講義と演習のバランスが良かった | 3(50.0) | 4(57.1) |
| | 正常・異常を理解した後に演習できたのはよかった | 2(33.3) | 0 |
| | 映像がわかりやすかった | 1(16.7) | 0 |
| | NA | 0 | 3(42.9) |
| セクシュアリティと助産師のケア (在校生13名、臨床助産師1名) | 講義と演習のバランスが良かった | 9(69.2) | 0 |
| | パワーポイントや資料がわかりやすかった | 3(23.1) | 0 |
| | NA | 1(7.7) | 1(100.0) |

実数 (%)

3) 各セミナーの理解度、満足度

理解度の平均は、『フリースタイル出産の理論と実際』では、在校生4.7点、臨床助産師4.9点、『IBCLCによる母乳育児支援』は、在校生4.8点、臨床助産師4.9点、そして、『セクシュアリティと助産師のケア』は、在校生、臨床助産師ともに5点満点であった(表5)。全体的に在校生より臨床助産師の方がやや高い傾向にあるが、両者ともに高得点で、理解度は良好であった。

満足度の平均は、『フリースタイル出産の理論と実際』が、在校生4.8点、臨床助産師5.0点、『IBCLCによる母乳育児支援』は、在校生4.8点、臨床助産師4.9点、『セクシュアリティと助産師のケア』は、在校生、臨床助産師ともに5点であった(表5)。満足度も在校生と臨床助産師ともに高得点であり、両者ともに満足度は高かった。

4) 受講者の学び

各セミナーにおける受講者の学びを、在校生と臨床助産師それぞれに自由記述の回答から類似する記述内容をまとめ、カテゴリーを抽出した。なお、1名の受講者の記述内容から複数のカテゴリーが抽出される場合もあった(表6)。また、『フリースタイル出産の理論と実際』の受講者の内1名は、学びの記載がなかった。以下では、抽出されたカテゴリーを< >で、記述内容を「」で示している。

(1) 『フリースタイル出産の理論と実際』

在校生の学びは、<知識・スキルの向上>、<ケアのイメージ>、<モチベーション・意欲の向上>であった。在校生は、フリースタイル出産の理論を学ぶことで、出産のメカニズムについての知識を獲得し、ロールプレイでフリースタイル出産を産婦として実際に体験し、根拠を考えた産婦への<ケアのイメージ>ができていた。そうして得た<知識・スキルの向上>は、「産婦が満足のない

く出産をするには視野を広げる必要がある」など、今後の学習への<モチベーション・意欲の向上>につながっていた。

臨床助産師の学びは、<知識・スキルの向上>、<助産師に必要とされる能力の再認識>、<モチベーション・意欲の向上>であった。臨床助産師は、「産婦に何が必要か、どうしたいのか考えながら寄り添うことの大切さを改めて感じ」、それが<助産師に必要とされる能力の再認識>の機会となっていた。また、学生と一緒に受講することは学習への<モチベーション・意欲の向上>につながり、さらに臨床現場で行うケアへの<知識・スキルの向上>にもつながっていた。

(2) 『IBCLCによる母乳育児支援』

在校生の学びは、<知識・スキルの向上>、<ケアのイメージ>、<モチベーション・意欲の向上>であった。在校生は、「実際に働いている方のロールプレイを見せていただいて、イメージをつけることができた」、「(褥婦に)自信をもってもらうことが重要」と受講者である臨床助産師の行ったロールプレイにより<ケアのイメージ>ができ、<知識・スキルの向上>となっていた。そしてそれは、「産褥実習で母乳育児を支援していきたい」と、実習での学習への<モチベーション・意欲の向上>につながっていた。

臨床助産師の学びは、<知識・スキルの向上>、<助産師に必要とされる能力の再認識>、<自尊感情の高まり>であった。臨床助産師は、「異常時の対処方法について具体的に学べたことが印象的だった」と、セミナーが<知識・スキルの向上>につながっていた。また、なるべく手を出さずに支援するセルフケアの大切さを再認識するなど<助産師に必要とされる能力の再認識>の機会となり、臨床で行っているケア・サポートに自信を持つことができたことは<自尊感情の高まり>と

表5 2019年度臨床助産学セミナーの理解度と満足度(平均点)

| テーマ | 理解度 | | 満足度 | |
|-------------------------------------|-----|-------|-----|-------|
| | 在校生 | 臨床助産師 | 在校生 | 臨床助産師 |
| フリースタイル出産の理論と実際 (在校生6名、臨床助産師8名) | 4.7 | 4.9 | 4.8 | 5.0 |
| IBCLCによる母乳育児支援 (在校生6名、臨床助産師7名) | 4.8 | 4.9 | 4.8 | 4.9 |
| セクシュアリティと助産師のケア (在校生13名、臨床助産師1名) | 5.0 | 5.0 | 5.0 | 5.0 |

理解度：5点・よく理解できた、4点・ほぼ理解できた、3点・どちらともいえない、2点・やや理解できなかった、1点・全く理解できなかった

満足度：5点・とても満足、4点・やや満足、3点・どちらともいえない、2点・やや不満足、1点・不満足

表6 2019年度に行われた臨床助産学セミナーにおける受講者の学び

| テーマ | 在校生 | 臨床助産師 |
|--|---|--|
| <p>フリースタイル出産の理論と実際 (在校生6名 臨床助産師8名)</p> | <p>知識・スキルの向上</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お産のメカニズムを理解することができた。(1名) ・ケアのイメージ ・ロールプレイでフリースタイル分娩を行い、体勢はしんどくいきみ方は難しかったが、実際に体験できて良かった。(3名) ・分娩台でもフリースタイルでも、どうしてそうするのかを考えると大切だとわかった。(1名) <p>モチベーション・意欲の向上</p> <ul style="list-style-type: none"> ・産婦が満足いくお産をするには、視野を広げる必要があるとよく分かった。(1名) | <p>知識・スキルの向上</p> <ul style="list-style-type: none"> ・分娩を進行させるためのケアにつなげられそうだったと思った。(1名) ・今後は、産婦さんが主体となってお産ができるように援助していいと思った。(2名) <p>助産師に必要とされる能力の再認識</p> <ul style="list-style-type: none"> ・産婦さんに何が必要か、どうしたいのか考えながら寄り添うことの大切さを改めて感じ、考える機会になった。(3名) <p>モチベーション・意欲の向上</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生さんと一緒に受講することで、もっと基礎の知識をかためなければと思った。(1名) |
| <p>IBCLCによる 母乳育児支援 (在校生6名 臨床助産師7名)</p> | <p>知識・スキルの向上</p> <ul style="list-style-type: none"> ・母親にとって一番分かりやすい言葉で説明することが大切であり、自信を持ってもらうことが重要である。(4名) ・乳房ケアは奥深いと気づく機会となった。(1名) <p>ケアのイメージ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実際に働いている方のロールプレイを見せていただいたり、イメージをつけることができた。(1名) <p>モチベーション・意欲の向上</p> <ul style="list-style-type: none"> ・産褥実習で実際に母乳育児ケアを支援していきたいと思った。(1名) | <p>知識・スキルの向上</p> <ul style="list-style-type: none"> ・異常（トラブル）時の対処方法について具体的に学べたことが印象的だった。(1名) <p>助産師に必要とされる能力の再認識</p> <ul style="list-style-type: none"> ・母親が自信を持っているよう、なるべく手を出さず母親自身が出来るように支援することが大切だと再認識できた。(4名) <p>自尊感情の高まり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今やっているケア・サポートが間違っていないと、自信がついた。(1名) |
| <p>セクシュアリティと 助産師のケア (在校生13名 臨床助産師1名)</p> | <p>助産師の対象の理解</p> <ul style="list-style-type: none"> ・助産師の対象が女性の一生と男性を含むことの実感が湧いた。(2名) <p>知識・スキルの向上</p> <ul style="list-style-type: none"> ・セクシュアリティについての理解が深まった。(1名) ・性に対する意識が変わった。(4名) <p>モチベーション・意欲の向上</p> <ul style="list-style-type: none"> ・助産師にしかできない性教育の重要性を感じた。(2名) ・性感症に対しての認識が変わり、予防の必要性が深まった。(3名) ・家族計画の指導に活用したい。(2名) | <p>助産師に必要とされる能力の再認識</p> <ul style="list-style-type: none"> ・若者に対しての性教育をする中で、気持ちや状況を理解し、共感することが大切であり、それをふまえて必要な情報を伝えなければならぬと思った。(1名) <p>モチベーション・意欲の向上</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中期中絶をする若者に対してや、それ以外でも、“性”を真面目に考えられるよう、職場で役立てたい。(1名) |

() 類似内容の記述人数

なっていた。

(3) 『セクシュアリティと助産師のケア』

在校生の学びは、〈助産師の対象への理解〉、〈知識・スキルの向上〉、〈モチベーション・意欲の向上〉であった。在校生は、「助産師の対象が女性の一生と男性を含むことの実感が湧いた」など、〈助産師の対象の理解〉が深まるとともに、セクシュアリティについての理解や性に対する意識の変化など〈知識・スキルの向上〉と、「助産師にしかできない性教育の重要性を感じた」、「家族計画の指導に活用したい」などといった学習への〈モチベーション・意欲の向上〉につながっていた。

臨床助産師の学びは、〈助産師に必要とされる能力の再認識〉と〈モチベーション・意欲の向上〉であった。臨床助産師は、若者に対し、共感的な態度で必要な情報を伝えなければならないと、〈助産師に必要とされる能力を再認識〉することが、臨床現場で性教育を行う上での〈モチベーション・意欲の向上〉につながっていた。

V 考察

1. 臨床助産学セミナーの意義

1) 継続的に行われてきたセミナーについて

これまで継続的に行われてきた臨床助産学セミナーは『フリースタイル出産の理論と実際』と『IBCLCによる母乳育児支援』である。そこで、まずこの2つのセミナーの意義を考察する。なお、開業助産師を講師とする『フリースタイル出産の理論と実際』と、『IBCLCによる母乳育児支援』は、臨場感あふれるセミナーである。

『フリースタイル出産の理論と実際』は、実技をまじえた学習が、在校生にとっても臨床助産師にとっても〈知識・スキルの向上〉に有益であった。特に、在校生にとっては助産院での継続事例実習で実際にフリースタイル出産の介助を行うことがあり、フリースタイル出産介助の機会があった学生には役立っていた。そして、卒業生は、卒業後4年目頃からフリースタイル出産、助産師外来、院内助産など、自律的な助産師業務を担っており、助産師としての臨床の場で、「分娩介助技術の理論」や、本セミナーで認識した「産婦の分娩法へのニーズ」を活かした助産ケアを実践していた。本セミナーが助産師の自律につながる効果をもたらしていたことは最も重要な点である。

『IBCLCによる母乳育児支援』においても、在校

生も臨床助産師も具体的な支援の方法について学ぶことができていた。井本(2015)によれば、母乳育児支援の研修にはレクチャー形式より参加型のワークショップが効果的である。本セミナーにおいて、在校生は臨床助産師が行ったロールプレイで、褥婦への〈ケアのイメージ〉ができていた。臨床助産師とともに受講することによって学びが深まっていたことが重要であり、在校生にとって実習を目前に控えて行う本セミナーは、実習で役立つものであった。卒業生も、臨床の場で「母乳育児支援の知識」が役立っていた。

春名(2019)は、助産師基礎教育において、「専門職の自律性の涵養として、助産師としてのアイデンティの形成が教育項目にあげられている。助産師が助産業務において専門職として自らの判断に責任をもって自律して働く姿を見る機会がなければ、自律した助産師のロールモデルを見つけることは難しい」と述べている。開業助産師によって行われる臨床助産学セミナーは自律性の涵養につながっているのではないかと考えられた。

A大学の臨床助産学セミナーは、臨床助産師も受講している。古川ら(2010)は、病院や診療所で勤務する助産師がキャリアアップに向けて希望する研修内容は「フリースタイル出産」、「ハイリスク妊産婦ケア・管理」、「乳房管理」、「自然分娩・介助技術・分娩中の対応」であることを明らかにした。そこで、2011年に大学病院、産科診療所、有床助産院で上記内容に関する研修を受講した中堅助産師の、研修受講による助産師としての自律性とキャリア成熟度の変化について調査したところ、ともに上昇していたという(古川、2011)。一方、本セミナーは臨床助産師にとっては教育機関で助産師学生と共に受講する研修である。受講者は、助産師経験1年から37年と大きな幅があるが、開業助産師から自律的な助産実践を学ぶことが〈助産師に必要とされる能力の再認識〉といった助産観の再構築につながり、学生と共に学ぶことが学習への〈モチベーション・意欲の向上〉につながっていた。大学という教育機関で行われてきた臨床助産学セミナーは、臨床助産師にとっても、大きな教育的意義があったと考えられた。

以上より、これら2つのセミナーは、A大学学生にとって在学中の実習はもとより、卒業後、助産師業務の臨床実践の中でも活かせることができおり、経験年数を重ね、自律的な助産実践を行っていくなかでより役立つなど、長期的な学習効果

をもたらしていたことが明らかとなった。特に、ロールプレイによる実践的な指導方法は、在校生にとっても臨床助産師にとっても、臨床実践に役立つセミナーとなっていると考えられた。

2) 2019年度に新たに行われたセミナーについて

2019年度に、新たな試みとして行われた臨床助産学セミナーは、『セクシュアリティと助産師のケア』であった。

2019年度は臨床助産師への案内が不十分で受講者は1名と少なかったが、在学生にとっても臨床助産師にとっても満足度が高いものであった。

セクシュアリティは、近年、性の多様化とともに一般的にも注目されており、助産師が知識を深めるべきテーマである。助産師としてセクシュアリティについて専門的に研究している講師から新たな知見や知識を得る貴重な機会を得たことが満足につながったと考えられる。助産師の自律を目指す教育内容として意義があるものと考えられた。

2. 今後の課題

1) 今後行うべき臨床助産学セミナーの内容

卒業生が今後希望する臨床助産学セミナーの内容は、「マタニティケア能力」、「ウイメンズヘルスケア能力」、「専門的自立能力」、「倫理的感応力」に関するものであった。

一方で、全国助産師教育協議会(2020)は、2020年1月に、「望ましい助産師教育におけるコアカリキュラム(案)」を提示した。これは、今後の人口動態、社会情勢、周産期医療、女性医療から、将来に向けて育成したい助産師像を「生涯にわたる女性の性と生殖に関連した健康に資するために、助産師として社会に貢献できる人」とし、この案には助産師に今後さらに期待される能力として、①医療機関だけでなく地域をはじめとするあらゆる場におけるケアの拡大 ②プレコンセプションケアの強化 ③ウイメンズヘルスケアの強化 ④助産の基盤となる医学・薬学の専門性の強化 ⑤多様な文化的背景をもつ母子や家族の理解とケアの強化の、5つが盛り込まれている。

そして、厚生労働省(2019)による、保健師助産師看護師学校養成所指定規則の改正案では、2022年度より履修単位数は現行の28単位から31単位へと増加する。過密なカリキュラムのなかで行われている学士課程における助産師教育も、周産期を取りまく社会情勢のなかで、教育の質の向上

を目指し、卒業生の希望をふまえつつ、さらに工夫し行っていく必要がある。

A大学で、当初から継続して行われてきた臨床助産学セミナーは、『フリースタイル出産の理論と実際』、『IBCLCによる母乳育児支援』と、主に「マタニティケア能力」の向上に関する内容である。コアカリキュラム(案)には、「マタニティケア能力」の向上に関する内容は特に挙げられていないが、A大学卒業生の多くの就職先では、おおよそ卒後4年をめどにフリースタイル出産の介助や母乳外来を行っている。『フリースタイル出産の理論と実際』と『IBCLCによる母乳育児支援』、この2つのテーマに関しては、臨床実践のなかで役立っていること、臨床助産師からのニーズもあること、卒業生が、「マタニティケア能力」、「専門的自立能力」、に関する内容のセミナーを希望していることを考慮すると、今後も続けて開催していく必要があると考える。

そして、『セクシュアリティと助産師のケア』についても、性の多様性への理解の面から、今後特に教育を行っていく必要のあるテーマであり、卒業生が「ウイメンズヘルスケア能力」、「倫理的感応力」に関するセミナーを希望していることから、専門家を招いての開催は、今後も不可欠と考える。

2) 到達目標の明確化と運営のあり方の検討

臨床助産学セミナーは、在校生と臨床助産師の参加が混在するセミナーであるが、これまでに行われてきた臨床助産学セミナーは、到達目標が明確化されていなかった。今後はそれぞれのセミナーごとに到達目標を明確化し実施する必要がある。

また、各セミナーの運営も、これまで講師任せにて行われてきた。今後は、より効果的なセミナーにしていくべく、教員と講師間で運営方法を検討し、共同で取り組むことも重要な課題である。

VI 結語

学士課程の助産師教育課程のなかで、開設当時から継続的に行われてきたA大学の臨床助産学セミナーは、卒業生にとっても、在学生にとっても、また実習施設を中心とする臨床助産師にとっても、臨床実践につながる内容であり、教育上の意義が示された。

今後も、周産期を取り巻く社会情勢の動向を加

味し、臨床での助産実践に有益な臨床助産学セミナーを継続して行くことが望まれる。

謝辞

本研究にご協力いただきました、A大学の助産師教育課程の卒業生、在校生、臨床助産学セミナーを受講された臨床助産師の皆様に、心より感謝いたします。

利益相反

論文内容に関し、開示すべき利益相反の事項はありません。

文献

- 古川洋子, 中野育子, 岡山久代, 中西京子, 高橋里亥, 村上節. (2010). 勤務助産師のキャリアアップに関する研究—助産師の研修希望とキャリアニーズ—. 滋賀母性衛生学会誌, 10, 9-16
- 古川洋子, 岡山久代, 中野育子, 中西京子, 高橋里亥, 村上節. (2011). 滋賀県助産師キャリアアップ研修の評価と課題—平成22年度 中堅助産師研修—. 滋賀母性衛生学会誌, 11, 34-39
- 春名めぐみ. (2019). 院内助産・助産師外来を担う助産師をどう育てるか. 周産期医学, 49(3), 2019-3
- 井本宣子. (2015). スタッフ教育～スタッフが変わればお母さんも変わる: Step2. 日本母乳哺育学会雑誌, 9(1), 68-70
- 国際助産師連盟. (2010). 助産師教育の世界基準. <http://www.nurse.or.jp/nursing/international/icm/basic/standard/pdf/kj-03.pdf> (2019年5月17日取得)
- 厚生労働省. (2019). 看護基礎教育検討会報告書. <https://www.mhlw.go.jp/content/10801000/000475663.pdf> (2020年2月18日取得)
- 文部科学省. (2019). 2019年度看護系大学に係る基礎データ. https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/098/gijiroku/_icsFiles/afieldfile/2019/05/27/1417062_4_1.pdf (2020年11月28日取得)
- 日本看護協会. (2019). 2020年度予算・政策に関する要望書—大学・大学院における質の高い看護学

- 教育課程の推進—. https://www.nurse.or.jp/up_pdf/20190425154118_f.pdf (2019年5月17日取得)
- 日本助産評価機構. (2004). 平成20年度大学評価研究委託事業「助産分野における就職3年未満の実践家能力評価—大学院修士課程と大学課程の比較—」報告書.
- NPO法人日本ラクテーション・コンサルタント協会編. (2016). 母乳育児支援スタンダード第2版. 医学書院.
- 全国助産師教育協議会. (2012). 助産師教育のコア内容におけるミニマム・リクワイアメントの項目と例示, Vol.2. http://www.zenjomid.org/activities/img/min_require_h25.pdf (2019年5月17日取得)
- 全国助産師教育協議会. (2018). 助産師教育の質の保障、助産師養成数の確保に関する要望書. [H30.12.14, 27] http://www.zenjomid.org/activities/request_document.html (2019年5月17日取得)
- 全国助産師教育協議会. (2020). 望ましい助産師教育におけるコアカリキュラム (案). <http://www.zenjomid.org/info/index.htm> (2020年2月18日取得)